

# Eureka XIII

六年制通信 No.36 令和8年2月13日(金)号

## 年齢に耐える書物

この通信で私は気に入った本の再読を何度も勧めてきました。一度読んで面白いと思った箇所も、例えば十年後に読んだら何とも思わず全く違ったところに惹かれるということがあります。少し変かかもしれませんが、君たちと似ている気がします。私たちは中学高校の君たちしか知らないわけですから、十年後の君たちを見たら今私たちが抱いている印象と全く違っていてもおかしくないですからね。本も同じです。

ただ、君たちは変化しますが本は変わりません。君たちの印象が変わるのは君たちが成長するからであって、本を再読して感想が変わるのはこちらが年を取って変化していくからです。それが成長なのかただの老いなのかは知りませんが、私は、白状しますと「今週のおすすめ」本は君たちの読書のきっかけになってくれればという観点で、割と読みやすい本を選んでいきます。私自身が何度も読んでいる本を（これはおそらく君たちには面白くないだろうから）紹介するのはゼロではないですがなるべく遠慮しているのが現状です。君たちが「今週のおすすめ」から読書好きになってくれれば嬉しいし、後は自分の興味関心を広げていってくれればなお嬉しく思います。大学で読書案内をしてくれる先生に出会えるといいですね。

再読の話をもう一度しようと思ったのは、最近三島由紀夫の短編を再読したからです。新潮文庫に『花ざかりの森・憂国 自選短編集』があるのですが、その中に三島自身が自分にとって最も切実な問題を秘めた作品と評している『詩を書く少年』と『海と夕焼』が入っています。この二つの作品に対する私の評価が若い頃に初めて読んだ頃と今とでは正反対になったのです。なかなかここまで真逆になるのは珍しいので自分でも驚いています。『詩を書く少年』は努力しないでも詩が湧いて出てくる自分の天才を自覚する少年の独白で、恐らく少なくない部分が三島の実体験だと思いますが、若い頃は大層感動した覚えがあります。しかし再読してみて、何に感動したのか全くわからないくらい、正直に言えば、つまらなく感じました。三島ファンには叱られそうですけどね。逆に『海と夕焼』を初めて読んだ時は、ふーんそんな話もあるんだ、くらいにしか思えなかったのですが、今回は主人公安里の独白に深く考えさせられました。文庫の「解説」にあるように、信じた奇跡がついに起こらなかったことを杏里は考え続けます。奇跡が起きると神の啓示を受けたにもかかわらず何も起きなかった。それは「奇跡よりもさらにふしぎな不思議」ではないか。この物語を三島はどうして創作しなければならなかったのか、なぜこのモチーフが彼にとって切実な問題だったのかを考えると非常に興味が湧きます。これは若い頃には考えもしなかったことです。

昔、遠藤周作が何かに書いていたのですが、ある教会でミサがあつて遠藤の友人も出席していたのですね。友人はキリスト教に入信するかどうかを迷っています。遠藤さんが通路を歩いていた時にちょっと足をとられて友人の肩に手を置きます。その時、友人は入信する決意を固めたというのですね。この話も若い頃には特に感じるころはなただの偶然だと思っていたのですが、今の私はこの友人の気持ちが理解できません。『海と夕焼』を読み返して、遠藤さんのこの挿話を思い出しました。

さて、年齢を重ねると同じ本でも心惹かれる箇所が変わってくる。だから気に入った本は再読三読に値するわけですが、年齢とともに再読しても面白くない本がたくさん出てきます。私の場合、たとえ漱石といえども『道草』などに感動できなくなってくるのですね。あの程度の若者の悩みに共感できなくなってくるわけです。

しかし一方で、年齢に耐える本もあります。個人的な感想ですが中島敦や向田邦子はいいいですね。中島敦は三十代の若さで亡くなっているのに、作品に悪い意味での若さが出ていないのでしょうか、きっと。古典ではホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』は翻訳も素晴らしいので再読三読に十分耐えます。

ちなみに何度読んでも、自分の解釈が変わることはあっても色あせることなく感心し勉強になるのは、東洋では断トツで『論語』ですね。伊藤仁斎が『童子問』で『論語』を評して「最上至極宇宙第一の書」と書いていますが、むべなるかなと言ったところでしょうか。君たちが若いうちに、再読三読に耐え、また自分が年齢を重ねても鑑賞に耐える本に出会えることを祈っています。ちなみに、求めなければ出会えませんよ。

### 今週のおすすめ

・清水春木 『旅立ちの日に』（中公文庫）

清水さんの小説は読んだことがなくて、『さよならの向こう側』を探しに行ったのですがこれまたなくて、偶然手に取ったのがこの本でした。

舞台は小さな港町。血のつながらない親子の成長と彼らに関わる人々それぞれの再生物語です。定食屋を営む桜木の妻が事故で亡くなります。幼い息子大輔を残して。初めはありきたりな物語で、アジフライがおいしそうだからの感想しか出てこなかったのですが、物語が進むにつれて、特に最終章になって「えっ!? そうやったん!?!」という嬉しい謎解きのような設定に驚かされます。

この本の第一話の前に、恐らく作品のモチーフになっている詩が書かれています。井伏鱒二が唐代の詩人于武陵の「勸酒」を訳したものです。私は久しぶりに目にしました。最後の一行が有名ですね。

コノサカヅキヲ受ケテクレ  
ドウゾナミナミツガシテオクレ  
ハナニアラシノタトヘモアルゾ  
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

こういうの、元の漢詩を知りたくありませんか？ どうぞ調べてみて下さい。

BGMは 柴咲コウ の かたちあるもの でした…。